

説教要旨「赦しの眼差し」

ルカによる福音書6章37～42節

「目から鱗」ということわざがあります。これは使徒言行録に描かれているパウロの回心の出来事が由来のことわざです。回心する前のパウロは、自分の目にある丸太に気付かずに『さあ、あなたの目にあるおが屑を取らせてください』とイエス様の弟子たちを裁いていたのです。人のことをあれこれ批判している人が、実は肝心なことを何も分かっていない、ということがよくあります。自分は盲人ではないから道案内が出来る、未熟な弟子ではなくて、ものがよく見えている師として人を教え導くことができる、と思っている。しかしその目は大きな丸太で塞がれてしまっているのです。私たちも、自分は目が見えていて、人のことを批判することができる、あの人を罪人として断罪することができる、と思っている時にこそ、自らの目が丸太で塞がれていないかを確認しなければなりません。

イエス様はここで、本当の意味で見えている目とは、人を裁かず、罪人だと決めず、赦し、与えようとする、そのような目なのだ、と教えておられます。もしも私たちが、人のことを裁いてばかりおり、人を罪人だと決めつけ、赦そうとしない、人の苦しみや悲しみに気付かず、自分から進んで助けようとしないう、そのような生き方をしているのであれば、私たちの目は丸太で塞がれてしまっていて、見るべきものが見えていないのです。

私たちは、本当の意味で目が見えていない偽善者です。見えるようなつもりになって、人を裁き、批判し、それで自分が立派になったように勘違いしてしまふ者です。そのような私たちが神さまは憐れんでくださいました。神様の独り子であられるイエス様が、ご自分の命を犠牲にして、この丸太を取り除いて下さったのです。この主イエスの十字架の死による罪の赦しの恵みにあずかることによって、私たちの目は開かれ、本当の意味で見えるようになるのです。イエス様による赦しの恵みによって生かされている者として、お互いに忠告し合い、お互いに悔い改めながら、赦し合う歩みへと送り出されてまいりましょう。

(2018・9・2 説教者：稲垣真実)